

緒 言

紀要編集委員会

グローバル化の一方、世界では今、民族間の対立や狭量な自国第一主義、不寛容の精神が見え隠れしている。日本においても、多様性に関する一般的理解は進んだ感があるが、異なる意見を排除しようとする意識や、マイノリティへの差別や偏見が払拭されたとは言い難い。そして「学生と教員との身近な距離感」を標榜している本学において、さまざまな個性をもつ学生たちに、私たちは適切に向き合っているのだろうか。

こうした問題意識のもと、紀要編集委員会は本特集を企画した。寄稿を依頼した教員には特集の趣旨を念頭に置いたテーマをそれぞれ設定して自由な見解を述べていただくこととし、各々の関心のある分野に引きつけた論考も歓迎する旨を伝えた。

執筆者各位は企画の趣旨をよく汲んでくださり、並々ならぬ激務の中、まさしく多様な観点から論考をお寄せくださった。問題を考える端緒となれば幸いである。

多様性と向き合うための教育

稲 澤 努（表現文化学科准教授）

私は文化人類学を専門としており、本学の共通教育においても、文化人類学の基礎を教える講義を担当している。欲をいえば、受講生たちに15回の講義を受け終わった時に覚えておいてほしいことはいろいろある。しかし、基本的にはまず「人類の文化は多様である」「文化に優劣はない」ことを理解してもらいたいと考えている。グローバル化が進む現代だからこそ、さまざまな文化を尊重する必要があるといえよう。ところが、期末試験などで「文化人類学における重要な考え方である『文化相対主義』を『優劣』という言葉を用いて説明しなさい」といった出題をすると「文化相対主義とは、文化に相対的に優劣をつける考えである」という不思議な(?) 答えが毎回あり、そんな答案を書いたのがまじめに毎回授業に出席している学生だった時には自分の指導力のなさを痛感してがっかりする次第である。教科書にはどこにもそんなことは書いていないし、授業中も何度も「文化に優劣はない」という話を繰り返していたつもりなのであるが。

また、我々人類学者の多くは、人類の文化が多様であることを学生たちに少しでも体感してもらおうと、授業では視聴覚資料を用いたりしながらさまざまな異文化について紹介している。こうした人類学者があつまると話題になるのは、最近の学生たちが異文化を見た際に見せる「日本に生まれてよかった」という反応への戸惑いである。過酷な気候の中での狩猟や、見たことのない儀礼、食べ物とは全く思えない食べ物、ヒトと動物との距離感……。人間がさまざまな面で「違うことに違和感をもつ」のは当然である。しかし、そこで「日本に生まれてよかった」としか感じられないというのは、完全な思考停止ではないだろうか。

その原因のひとつは、異文化への関心の低さであろう。もちろん、そうでない学生もいるが、